『源氏物語』桐壺巻の読解指導

―『湖月抄』と合わせ読む―

国語科　　畠　山　俊

近年，資料を読み合わせる力が求められている。複数の資料から読み取ったことを総合する力である。この論考では古文とその注釈書を読み合わせることによって古文の深い理解に至る方法（いわゆる「味読」）や古文の読解の助けになるやり方を示す。

〈キーワード〉考えの形成共有　新学習指導要領　読み合わせ　『源氏物語』　源氏物語の注釈書

1.　考えの形成共有

今年度の高校二年生から使用が始まった「古典探究」において従来とは異なる授業のやり方が求められているのだろうか。その点を意識しながら，新科目的な読みの試みを提示したい。『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説　国語編』（文部科学省）では「読むこと」の指導事項としていくつかの項目が上げられている。「読むこと」「考えの形成共有」キでは「古典探究」に関するものとして「関心をもった事柄に関連する様々な古典の作品や文章などを基に，自分のものの見方，感じ方，考え方を深めること。」とある。この事項を指導するに当たって，以前から部分的に取り入れていたことではあるが，『源氏物語』とその注釈書である『源氏物語　湖月抄　増注』（北村季吟　有川武彦校訂　講談社学術文庫　以下『湖月抄』）とを読み合わせながら読解を行おうと構想している。『湖月抄』は「鎌倉期の研究の集大成であった『河海抄』に対して，これは室町期までの研究の粋を集大成したものとして貴重である。」（『湖月抄』所収　「『源氏』味読のための理想的注釈書」秋山虔による）。この文のタイトルにもあるように『源氏物語』を生徒とともに味読するために注釈書を合わせ読もうというのが授業の目的となる。『湖月抄』本文をひもときながら教科書本文に沿って読みのポイントを示していきたい。なお，『湖月抄』の本文は講談社学術文庫本そのままを引用しているが，一部旧字体を新字体に改めてある。

さらに，大学入学共通テストでは複数の文章を読み合わせる問題が毎年のように出題されている。中には古文とその注釈書を読み合わせる問題もある。実際の授業で『湖月抄』のテキスト本文を提示するかどうかは取り上げる箇所にもよろうが，『湖月抄』本文を見せて教科書の『源氏物語』の本文と読み合わせる機会があれば，古文と注釈書がどのような関係にあるのか知る機会となろう。

2.1.　いづれの御時にか

「いづれの御時にか，女御・更衣あまた候ひ給ひける中に，いとやむごとなききはにはあらぬが，すぐれて時めき給ふありけり。」『源氏物語』の有名な冒頭の一文である。古典作品の冒頭部分は『源氏物語』に限らず，暗記されている方も多いだろうし，根強い人気がある。ところが，『知ってる古文の知らない魅力』（鈴木健一　講談社現代新書）によると，あの名文で名高い『徒然草』の冒頭でさえも先行作品の影響が見られるという。『湖月抄』「師説」によるとこの『源氏物語』の冒頭も「此発端の詞は伊勢の歌集に，『いづれの御時にか有りけんおほみやす所と聞ゆる御局に，大和に親ある人さふらひけり』とかけるにもとづけり。但かの家集は，宇田の帝の御時，七條の后にいせの御のみやづかへせし事を書おぼめきて，態態かくかけり。此

物がたりは，桐壺の帝をまさしく延喜に比したりとはいへど、実は作物語なれば，その時代をいづれと申べきにあらざるにより, か様に書出たる心ばへ, 伊勢の家集の詞ばかりを用ひて, 心をかへたる奇妙なるべし。」とある。この冒頭の一文は物語の始発の役割を担っていると読み解かれることが多い。過去の出来事と明示しないことが自分の知っている世界を表現しているように見せながら（おぼめき），創作（作物語）が始まる宣言と読めるというのである。また、この冒頭は他の作品の冒頭と読み比べられることも多い。例えば本校で 2023 年度使用している『精選　古典探究　古文編』（明治書院）では，教材読解後の問題として「『いづれの御時にか』という言い方は，物語の書き出しとしてどのような効果があるか。『竹取物語』や『伊勢物語』，『今昔物語集』などの作品の冒頭と比較しながら，意見を交換してみよう。」が付いている。その解答としては「『竹取物語』は「今は昔，竹取の翁といふ者ありけり。」と始まり，『伊勢物語』は「昔，男ありけり。」で始まる章段が多く，『今昔物語集』は「今は昔」で始まる話が多い。これらの作品では書かれていることが過去の出来事であることを明示している。いっぽう源氏物語は「いづれの御時にか」と時間を明示しない形で始まっており，そのことによりかえって内容に現実性を持たせてすぐに感情移入できるように仕向ける効果がある。」（同教科書　『指導ガイド』による）となっている。おぼめかしているというよりは時間を明示することを避けて，感情移入させようとしているというのである。そして「いとやむごとなききはにはあらぬが，すぐれて時めき給ふ」方がこれからクローズアップされていくのだから，これからの物語をその方の身になって読もうとすることが必要だとこの始発は求めている。古注と教科書の設問とを考え合わせると，事実を想起させながら作り物語として感情移入させるという高度な技法が用いられていることを生徒に意識させることができる。冒頭部でいかに読者をつかむか，その方法を生徒にじっくり考えさせたい。

2.2.　ましてやすからず

ここも問われることの多い箇所である。使用教科書でも脚問として「『ましてやすからず。』とあるが，なぜか。」とある。解答として「后としての位の高い女御が帝の寵愛を受けるのなら納得がいくが，自分たちと同列の更衣の中で，一人だけ抜きん出て寵愛されている者に対する妬みには，相当激しいものがあるから。また，女御たちは御寵愛の深かった更衣に対し，位の高さの点でプライドを保てるものの，同列や下位の更衣たちは，御寵愛の面でも地位の面でも彼女に太刀打ちできず，プライドを保つことができなかったから。」が用意されている。『湖月抄』にはこの部分に「上中下の姓を褒貶したる心也。上臈は物ゑじなども大やうなるべし，殊勝の詞也。ましてやすからずと云にて下臈の姓見えたり。」と注している。身分が高い人は「物ゑんじ（現代語「嫉妬」）」も大らかで，身分が低い人はそうではないと身分の上下と性格の善し悪しを関連付けて論じている。それに比べると教科書の解答ではいろいろと理屈をつけている。「プライド」などという現代的な語を用いながら説明を尽くすのである。それはこの部分がそれだけわかりにくい証左であろう。そうであれば，『湖月抄』本文を生徒にそのまま提示するのは難しいかもしれないが，例えば身分の上下と性格の善し悪しを結び付ける考え方もあると生徒に示して，それに対してどのように考えるかを問うてみてから，脚問を考えさせるやり方も考えられる。身分の上下があること自体が理解しにくい部分があるし，上＝善，下＝悪となると現代では許容しがたい。そうすると他に理由を求めるために説明が必要になる。古注と読み合わせることで社会が異なるとものごとの捉え方も異なることを生徒に気づかせたい。

2.3.　あぢきなう

『湖月抄』ではこの部分に『玉の小櫛』の説として「天の下の人も，あじきなき御しわざとするよし也。或抄云，はじめに女中のねたみをいひ，次にかんだちめうへ人といひ，ここに天の下にもといへり。」とある。桐壺更衣への反応が時間を追ってさざ波のように広がっていく様子が想像できよう。まさにこの場面はその

ように読みたい。女性たちの間では「女御」→「同程度の更衣」→「桐壺更衣より低い身分の更衣」という具合に反感の程度も上がっていくように効果的に書かれている。また，「朝夕の宮仕へ」に帝が同伴することにより桐壺更衣への反感は後宮を越えて「上達部・上人」などにも広がっていく。そして最後には宮中を越えて「天の下」にまで広がるのである。このように桐壺更衣に対する反応が広がっていくことを表現することにより，周りすべてが少しずつ桐壺更衣への反感に傾いていく，追い詰められていく状況がそれこそ感情移入できるくらいに感じられるだろう。このようなものごとの伝わり方は現代でも十分に想像のつくことである。古今東西に共通する人間心理とも言えよう。そのようなことが物語に書かれていることを理解することも意味がある。物語的効果の面でも桐壺更衣の窮状を的確に描写していく手法として秀逸である。これは古文本文を読解することでも読み取れることではあるが，古注を参考にすると読みの方向がはっきりしてくる。

2.4.　よしあるにて

ここも『玉の小櫛』が引かれている。「よしある人にての意也。人は上にある故にはぶけり。さて此にては，下のもてなし給ひけれどといふへつづく詞也。」「いにしへの人のよしあるにて」の部分は「いにしへの人のよしある人にて」と読めるというのである。古注の説明を読むと文の構造がよくわかる。「人の」の「の」は文法的には同格の「の」である。古注の時代には同格の「の」とは言わなかっただろうが，その意識はあったことがわかる。古注を参考にすることでこの部分を生徒に文法の問題として考えさせられる授業プランが浮かぶ。また，この部分の係り受けにも古注は言及している。確かにこの後の部分が挿入句となっているため，係り受けがわかりにくい。古注を参考にすることで，この文全体の構造を考えさせながら，生徒に読解させるポイントが見えてくるのである。読み比べをさせなくても，この部分を読解する際のポイントを古注から見出し，授業に生かすことができる。

2.5.　たまのをのこみこ

『湖月抄』には『細流抄』の説として「玉のをのこ花鳥の説尤興あり。」とあり、その後『花鳥餘情』が引かれている。「人の徳をも玉にたとへ、又形をも玉にたとふるなり。玉のをのこみこは、かたちのきよらなるをたとへていへり。但又詞のつづき、玉のをと命のかたへ取成侍る也。」「玉の男皇子」の部分には使用教科書では脚問があり，「『玉の男皇子さへ』とあるが、どのようなことを前提として『さへ』の語を用いてたのか。」とある。これに関しては『湖月抄』に「さきの世にも」を抜き出して注釈があり，「桐壺更衣と帝の御中，前世よりも浅からざりしにや，御子さへ出来給へりと也。」とある。つまり「御子」の前提となっているのが「前世よりの浅くはない仲」であるとわかるのである。これは「添加」の副助詞「さへ」の説明に役立つ。さらに，それを受けて「玉の」というのがどのような意味を添えているのかが，解説されていることになる。ここで注目したいのが，性格・容貌の素晴らしさだけではなく，「玉の緒」（現代語で「命」のこと）を連想させるという指摘である。そういう説があることを紹介したうえで，まったく前提無しに生徒に考えさせるのもおもしろいのではないだろうか。『源氏物語』のストーリーをある程度知っている我々には様々な想像もできる。しかし、生徒はこの前の部分（母親が病弱であること）から想像して母親が命をかけて産んだ子どもであると指摘するかもしれないし，ストーリーを知っている者がいれば誕生と生命とを掛けていると考えてもよいし，男皇子の長命を願っているなどと考えてもよい。教科書の字面からは想像しにくい指摘がなされていることはこの部分の読解を考える際に大いに参考になる。

2.6.　他の項目

・やむごとなききはにはあらぬが

「桐壺ノ更衣は大納言の女なれば，大臣の女などのやうに，きはめて上臈の分際にはあらぬがと也。やんとはねてよむべし。」
この注釈には「やむごとなき」を「やんごとなき」と撥音便で（「はねて」）読むとある。古文の撥音便についてはわかりにくいところがあるが，古注ではこのように読みの注記もなされている。これなどは古注をそのまま読ませて，読みの注記も存在することを確認させることもできる。
・すぐれてときめき給ふ
細流抄「時を得たり也。時宜にあへると也。」師説「桐壺更衣のすぐれて寵愛を得たるを云也。」
細流抄の注記は一般的な意味だが、師説の方はここでの桐壺更衣についての意味がよくわかる。これによっても「ときめく」は男性に用いられた場合「時流に乗って栄える」，女性に用いられた場合「寵愛を得る」と現代語訳するとわかりやすいと考えられる。語彙の問題として取り上げることができる。
・はじめよりわれはと
花鳥餘情「此段は女御更衣の中に三品ノ種姓をわかてり。我はと思ひあがり給へるといふは，大臣などのむすめの女御たる人也。おなじほどといふは，桐壺ノ更衣とおなじほどなる大納言のむすめなどの種姓をいへり。それより下らうの更衣は，非参議ノ三四位の品の女などをいふべし。」
女御と更衣との違いは必ず説明するところであろうが，おおざっぱに女御と更衣の違いを説明することも多い。この注釈のように女御，桐壺更衣と同程度の更衣，桐壺更衣より身分の低い更衣と三種に分けて説明したほうが本文でその三者を分けて描いていることとの関連でいっても適切である。
・あいなく
玉の小櫛「此詞数もなく多く有りそをことごとく見わたし合せてかむがふるに，何といふわきまへもなしに，うちつけに物することなり。ここもその意にて，おのが身にかからぬ人までも，何といふことなしに，目をそばむるなり。」
「あぢきなう」の項目とも関わるが，桐壺更衣への好ましくない反応が「おのが身にかからぬ人」にまで広がっていく様子が丁寧に説明されている。これを参考に教える側が「あぢきなう」の語彙の説明と合わせて生徒に解説することができる。
・かかることのおこりにこそ
玉の小櫛「かかるとよみて、事のおこりとよむべし。かかる事のと、つづけて見るはわろし。おこりは起りにて，はじまりといはんがごとし。驕とするはひがごとなり。」
この部分には教科書などでは脚注が付いていることが多い。確かにここで指摘があるように誤読の可能性があるところである。「事のおこり」が一語であると意識させることは必要である。また「おこり」は「驕り（おごり）」ではないとわざわざ注記しているのも注目される。全部をひらがなで提示して，どのように読むかを考えさせる。次に「驕り」とも読めることを指摘し，そう読むことにより誰のどのような「驕り」が考えられるのかを話し合わせるような活動も考えられる。
・御うしろみし
「しの字は助字也。」
「し」は現在では強意の副助詞と説明される部分である。ここもサ変動詞と誤読の可能性があるので，きちんと読解しておきたい部分となる。正確な読解を助けるような注釈がついている。
・なほより所なく
「猶の字哀なり。」
「なほ」が添えられていることに意味を見出している。「より所なく」という事態自体が困難を予想させるが，「なほ」があることにより「あはれ」を感じるという読解に関わる指摘がある。

・おほかたのやむごとなき

玉の小櫛「おほかたのは，俗にひととほりのといふ意也。」

この部分は「一の皇子」と「玉の男皇子」とを対比的に読み取ることが求められる。本校使用教科書でも教材後の問いに「『玉の男皇子（光源氏）』と『一の皇子』との違いはどのように描かれているか，ポイントとなる言葉を抜き出し，項目を分けて表にしてみよう。」とあり，項目として「母」「後ろ盾」「容姿」「帝の寵愛」とある。それぞれの項目に対応する本文部分を抜き出すことはさほど難しいことではないだろう。表を作って対比的に考えさせるのが読解の助けとなる。その際に「帝の寵愛」の部分で「おほかたの」の解説である「俗にひととほりの」というのが参考になる。ここの部分は「世」は「一の皇子」を大切にすることがまず書かれている。世の反応は「一の皇子」のみ書かれており，次に帝の思いとして「一の皇子」は「おほかたのやむごとなき御思ひ」であり，「玉の男皇子」は「私物に思ほしかしづ」いていると書かれている。今後，帝に大切にされている「玉の男皇子」が世にどのように受け入れられていくのかに物語の焦点が移っていくことが予想できる。

3. まとめ

以上のように教科書本文の『源氏物語』と古注集成である『湖月抄』とを読み合わせてきた。現代の注釈書が古注を参考にし，それが教科書にも反映しているとしたら古注を研究することは授業をするに当たって有益であると考えられる。古注をそのまま生徒に提示する方法もあるし，生徒には明らかにせず授業の中で生かす方法もある。生徒の実態と授業の組み立てを考慮のうえ，どのような方法で生かすことができるか、教師自身が判断すればよい。しかし，学習機会として古文本文とその注釈書を読み合わせるという作業を与えることは意義あることと言える。今回取り上げた部分では「ましてやすからず」や「やむごとなききはにはあらぬが」の花鳥餘情などは生徒に読ませて本文の読解に役立たせることができる部分ではないだろうか。この作業はいわゆる「読み比べ」であり，新学習指導要領で求められている言語活動を体現することになる。また，教える側だけが参考とするのなら「よしあるにて」「すぐれてときめき給ふ」「かかることのおこりにこそ」「御うしろみし」などを参考に，同格の「の」や強意の助詞の「し」などの文法事項，「ときめく」や「ことのおこり」などの語彙の説明がポイントとなることがわかり，授業の際の参考にすることができる。